
恋模様、晴れ時々雨。

宮 毬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋模様、晴れ時々雨。

【Nコード】

N4956Z

【作者名】

宮毬

【あらすじ】

短編で、中編な…長編とは言えないような物語をたくさん書く予定です。

ハッピーエンドやバッドエンドやたくさん書けたらいいと思います。

モノクロ 前篇

あるところ、小さな国がありました
小さな国で貧富の差はそれは大きく差がありまして

あるところ、二人の男女がいました

貧富の差により男女には大きな壁がありました

男は小さな国の有力な権力者の跡継ぎで教養もありました
ですが

女の方は貧乏のどん底にいました

金のためなら女はなんでもやるような冷酷非道でした

男の、小さい時のクリスマスは暖かな家で綺麗な服で

大きな七面鳥とクリスマスプディングにスープをおなか一杯食べ、

そして抱えきれない何個ものプレゼントを親戚や親からもらいそれ

はそれは幸せなクリスマスでした

大きなベットに大好きなおもちゃ 新しいブーツに服

男の小さな時はその少年の年なら欲しがるものは全て持っていました

女の、小さい時のクリスマスは地面凍る雪が降り積もりゴミが山積

みになる汚い路地裏で、追剥の服で

行き倒れになった死んだ者の服などをくすねていました

おなかには空き店から何個ものパンを盗み追いかけても逃げて暖

かい家の団らんの様子を睨んでいました

女は家族も親戚もいないのです

男は日曜日教会へミサに行くときに女と出会いました

女は美しく育ちましたが身なりはとても見ず簿らしかったのです

男は見惚れました　ですが女は睨みました

女は男のような家が自分たちのような貧乏人を見捨てていると思っ
ていました

男はこのような美しくて見ず簿らしい女は初めて見ました

女はこのように憎くて綺麗な装束をしている男を初めて見ました

男は仕事を覚えるために外国語や勉強をさらに今まで以上に難しく
しました

そして男は周りからも「天才」や「格が上」など誰からも称賛され
ました

女は体も売り生きるためだけにたくさん罪も犯しました　たくさん
盗みもしました

そして女は周りからは「愚か」や「娼婦」など道行く人に虐げられ
ました

ある日男は違う日曜日のミサの帰り、道行く女に話しかけました

「どうしてそんな身なりなのか」と。

女は笑いそしてすぐにすごい剣幕で男を睨みました

「好きでこんな生き様をしていると思うのか」と。

男は驚きました。

男の付添人は鞭を手に取りました

「殺すのなら、殺せよ。殺してくれよ。その方がもう楽だ。」

女は笑いながら言いました

それで男の付添人は鞭を振り上げましたが男はそれを止めました
女は今にも食って掛かりそうな形相で男を睨みました

男は对象的に微笑みました

「名前は？」

「同情するつもりか」

「僕：いや俺は、同情なんて一切してことがない」

男は笑い続ける

女は舌打ちする

「名前は？俺は、シュバルツ」

「フン、名前など、無い。」

「ない？」

女は名前を与えられる前に親に捨てられたので名前など無いのです
抱かれ名前は那场でつけられる字名のようなものでした

自分に名前はない。それは存在していないを指しているものだと思
っていました

「なら、俺が付けてやる。その代りに隣にいてくれないか？」

「は？」

女は驚きました

今までそんなこと言われたことが一度もないのです

追剥をし、抱かれて金をもらったらすぐに突き放される

なのに名前を聞き、無いならつけて隣にいてほしい？

なんと可笑しな男か。

「お前の目は節穴なのか。お前みたいな男はどこぞのお嬢様とか言
われる方がいい。馬鹿か。」

「関係ない。俺が惚れたのは、少なからずお前だ。名前はビアンコ・
カンドーレ、だ。」

「ビアンコ・カンドーレ…。」

女は何回も眩きました。

「異国の言葉で曇りなき純粋な純白という意味だ。だがそのままではな……。そうだ。ビアンコをビアンカに変えよう。」

「……。」

女は不思議そうな目で男を見ました。男は整った綺麗な顔を笑わせでもう一度言いました

「ビアンカ・カンドーレ。俺の隣にいないか。」

「お前の思うようなきれいな人間ではない。そして名前の意味もまったく違う。白と、いうより光さえもない黒の方が私には似合っている。」

女は俯きました

男は顔を上げさせました

「黒はどちらだろうな。」

そうして女を連れて帰りその日のうちに女は見るも美しいそこらのお嬢様よりも美しい娘となりました。

でも、女は怪訝そうな顔

ドレスも綺麗な髪飾りも身に着けたことがなかったからです。

頭に飾られているリボンもうっとおしく重く感じられるのです

「邪魔だ」

「でもとてもきれいだ」

女は……いえ、ビアンカは少し笑いました

シュバルツはビアンカをこの時愛してしまいました。シュバルツはビアンカの白い手袋がつけられている右手を優しく取りました、そうして大広間へ連れて行き食事をさせました

女はがつつくこともなく食べようとはせずただじっと見つめていました

「どうして？」

「え？」

「ここまで見ず知らずで初めて喋る女にここまで優しく……優しくす

るのはなぜだ？私を殺しても誘拐しても手に入るものは何もない、有り金も高価なものも何一つない。

「ビアンカに言ったら殴られそうだけれど、俺、いや僕がそんな金に困っているように見えるかい？」

「そうだな…困っていたらこんな服、とっくに売っているだろうな。」

「
ビアンカは笑いました。」

ビアンカも自分の心情に驚きつつありました。

今まで、優しくしてくれて隣にいろ、そうして名前を付けてくれた人。

だからこそ、どうしてだかが分からなかったのです

「でも一層分らない。何故、私を、誘拐した？」

「誘拐だなんてとんでもない。」

「だって…。そうだろう？連れ来て手に入るのは私そのものだけだ。」

「
だって僕は君が欲しかったから。」

「体が？」

ビアンカは笑いました。微笑みではなく、挑発的な笑顔。

対してシュバルツは真顔になりました。ビアンカは挑発的な笑顔を止めません。大広間に冷たい空気が広がるのを感じました。使用人も追い払い誰もいない大広間で大きな机に豪華な食事。でも、手は付けられることもなく冷めてきているようにも思えますが、それよりもまずシュバルツの心情が第一でした。

「僕は、女に不自由してはいない。」

「…ああ、その顔と財産を見れば一発でわかる。」

「でも、愛には不自由している。」

「…哲学的なことを言うのだな。」
シュバルツはふつと嘲笑するように顔を緩めましたがビアンカは泣いているようにも思えました

「僕に言い寄るのは金目当て、顔が目的と言うのが多いんだ。」

「ほう、顔が目的だなんて素晴らしい。」

「どこが。」

二人とも笑いました。冷たい笑いです。

少し間を置いてシュバルツは続けました。

「愛したのは、外見と金。僕自身の、中身ではない。」

外見。ビアンカは結構な自信家なのだ、と思ったがシュバルツの顔からしてどうやらそれは深刻らしい。

「言っておくけれど外見と金目的の話は使用人から聞いた。」
むつと顔をしかめたのがビアンカは面白く感じました

「そうか？わたしは相当な自信家だ、と思ったのだが。」

シュバルツは益々不機嫌な顔をしました。ビアンカは少しやりすぎたか、と思いました。

「僕は、ただ僕自身を愛してくれる女性を探していた。」

「わたしがあなたを愛す…とでも？何か大きな勘違いをしていないか。わたしは今まで、そう、お金のためなら何でもやって見せた。

今だってお金目的かもしれないのだぞ。それなのにあなたはそう言えるのか？」

「いや、きつとビアンカ。君なら僕を愛してくれる。君は自分でいう程ひどい人間ではない。」

ビアンカはため息をついてマナーも無視し、適当に銀で美しいフォークを手に取り近場にあったケーキを刺して食べ始めました。

それを静かにシュバルツは見ていました。ビアンカは今にも泣きそうな顔でした。

「どうして…わかる。」

「わかるからさ。だから僕は純粹純白と言う名を付けた。」

シュバルツは立ち上がりビアンカのところに行きました。ビアンカはフォークと置きシュバルツを見上げました。

優しく頬に手を添え、シュバルツはビアンカの右頬にキスをしました。一つですが優しく、温かいキス。シュバルツはビアンカを見て驚きました。泣いていたのです。…そう、彼女は生きてきて今まで一度もキスも優しい言葉も…貰えなかったのです。ですから生まれて初めてもらったキスと優しい言葉が胸に響き心が満たされる気がしたのです。

盗んだパンを食べた時、高価なものを盗んだとき。

その時は確かにうれしかったのですがどこか心の中、痛く苦しく、満足するものではありませんでした

ですが今は、違いました

全てが

ビアンカは泣きました。シュバルツはただ優しく抱きしめているだけでした。

そうして二人は結婚したのです。

ですが、二人の結婚を反対するものはそれはたくさんいました

最初から恵まれた結婚ではないことは二人とも知っていました
ですが、二人は幸せでした

二人とも本当に心から愛し合っていたのですから

ですが

その幸せを妬み、壊そうとする者は当然いました

そうでしょう。

身分も最下層で血縁は誰一人とおらず、外見以外は教養も何もない
のですから。

モノクロ 前篇（後書き）

後編も頑張ります！

駄文ですね…。はい、わかります。よくわかります…

モノクロ 後編

あるところにすごい玉の輿をした女がいました

女の名は、ありませんでしたが彼女を愛した男が彼女に名前をあげました

「ビアンカ・カンドーレ」

どこまでも純粹で純白と言う彼女はそれはそれは幸せでしたが、その幸せというのは一抹の物でした

路上の女と国有数のお坊ちやま

周りは反対をしました

女は責められいじめられました

ですが女：ビアンカは、男：シュバルツさえいたら良かったのでビアンカは我慢しました、それに彼女は喧騒に罵声というものは慣れっこでした。が、彼女は良かったのです。そう、自分を責められるのは我慢できましたが彼女が一番我慢ならなかったのがシュバルツ、彼女が最も愛する夫のことを悪く言われることでした

「本当、見る目がないわ。」

「何もないじゃない。」

「まさかあんなに…そうね、おバカだなんて思わなかったわ。」

使用人に友好関係を結んでいた家柄の娘、跡取り、たくさんから言われ彼女の心は確実に傷んでしました

「私が、ここにいなかったら今頃シュバルツは悪く言われやしない。」

この思いがいつしか、ビアンカの幸せを壊し始めていました

「ビアンカ、気にするな。」
「私は…。」

ビアンカは俯きました
暖かく美味しいはずの食事味気ないものに感じるのです
それに、ビアンカが一番に責められビアンカ自身も気にしていた事実、それはビアンカは子供がどうしても出来ないのです

「跡取りも産めないだなんて」
「何のためにいるのかしら」
「役立たずね」

「役立たず」。それはビアンカにとって最大にして最高の痛手となつたのです

あるところに大きなお屋敷がありました

そこにはまるで、そうどこかの童話のようにとても美しくとても貧しい女性が嫁入りしました

ですが周りは祝福などせずに妬み嫌いました
女性は悩みました

「ここにいていいの？」

シュバルツの家と友好的にあつた家がその友好関係を断ち切りました
「見る目がない家といたら、こつちまで被害にあう」と。

そうしてシュバルツの家はビアンカが嫁入りしてからどんどん落ちぶれていきました

誰もがビアンカのことを「疫病神」「悪魔の穢れ」「魔の娘子」と、嫌いました。ですがシュバルツはビアンカを離すことはしません
だんだんシュバルツも「魔の手に堕ちた」「もう終わりだ」「あの方の将来は目に見えている」など陰口をたくさん言われました
ビアンカは耐えられませんでした

二人が結婚してから5年後のクリスマス。シュバルツはビアンカを晚餐会に呼びに行きましたがビアンカは部屋にも屋敷にもどこにもいなかったのです

シュバルツは血眼になり必死に愛妻を探しましたがどこにもいません。ビアンカのクローゼットからビアンカをこの屋敷に連れて来た時に着させたドレスから一通の手紙が置いてありました。筆跡は間違いなくビアンカので宛名はシュバルツでした

そこにはまさに「魔の娘」に見合う内容だったのです

「どうせ、金目当てよ。」と。

ビアンカが失踪してから2年後シュバルツの家は元通りまた大金持ちの家となりました

そうして人々は誰もがビアンカのことを「魔の娘」と信じ、疑いませんでした

シュバルツも段々ビアンカのことを怨むようになってしまいました
「結局、金目当てなのか。」…と。

そうして何回目か分からないクリスマスが来ました
ビアンカはボロボロのドレスを引きずり歩いていました

7年前と同じ路地裏で追剥や盗み。ですが7年前と違っていたのは体を売らなくなったのことです

雪の上を素足で歩きその顔からは生気も覇気も何も感じられないのです

まるで糸の切れた操り人形のようにでした 狼狽に何度襲われたか。体は傷だらけ、心はボロボロ

ビアンカは体力的にも精神的にも死に近かったのです

ビアンカはいつの間にか来てしまいました
シュバルツと出会ったあの街路に

ビアンカは立ち止まり雪降る灰色の雲を仰ぎました

「ビアンカ・カンドーレ…」

その名前をつけた人もきつと今頃違う人と…

名前の意味

どこまでも純粹で純白…だっ たっ け…

お腹も空いたはず 眠いはず 寒いはず

なのに何も感じない…

ビアンカは座り込みました

家からは暖かそうな光がこぼれています

ふいにビアンカは何かを感じました

路地裏から雪踏む音

ビアンカはそちらを見ました

そこには一本のナイフを持つ狼狽

ですがビアンカは座ったまま

「…こんばんわ。」

ビアンカはナイフを握っている狼狽の右腕をそつと取りました
狂おしいほどの美しいビアンカの笑顔はそこで終わりました

シュバルツは日曜日のミサのためにあの7年前ビアンカと出会った
街路の前を馬車で走っていました

隣に座るは自分の子を妊娠している美しい淑女、そう新しい愛妻…

シュバルツは自然と、ビアンカと出会った街路を見ました

群がる人ばかり

「あら…？なんでしょう…？」

「見に行こうか？」

「ええ…病気で倒れていたら大変ですもの。」

愛妻と共にシュバルツは人をかき分け人が見ていたそれを見て、驚
愕しました

人だかりの中央で倒れていたのは間違いなく死んだいたのはビアン
カだったのです

幸せそうに、いやそれとも無理して笑っているのでしょうか

笑い、死んでいたのです

自分の心の臓を貫いて…

ビアンカの体の上には少しかり雪が積もっていました

「ビアンカ・カンドーレ」の名の意味にふさわしい

白く純粹で一転の汚れもない純白の雪が…。

モノクロ 後編（後書き）

本当は、愛していたけれど相手の幸せを思い自分の幸せと生を引換にした…みたいな感じです。

明日は晴れるかな、（前書き）

一応、ハッピーエンドのつもりで書きました。

明日は晴れるかな、

苦しいよ…と、呟いたけれど、きっと君には届かないだろう。

新月の夜。星だけが明るく空を照らす。

真っ暗な部屋の中、電気もつけないで静かに天井を見据える。

「ショウ！」

あの子が、あの人を呼ぶ声が頭をこだまする。

その名前は…と思い、醜い自分がいることに気づき嫌になる。だって、あたしは…あの人に聞いたんだ。

「なんて、呼べばいいのか分からない。」

「ショウでいいよ。」

消したくない。

あの子は彼女？新しい？大好きって言ったのに…。あの日からもう9か月。まだ忘れられないなんてバカ。頭を抱えこみ今日も一人で泣く。叶うことのない恋なのに…どうしてこんなにも好きになってしまったのか。人を愛するのに年齢が関係のならばきつとあたしは…。

今日も学校へ行く。あの子とショウは楽しそうにしているだろう。それでもあたしはもう何も言えないからただ…笑うだけ。何も知らないふりをして。それでもいい、ショウが幸せならって…。それで

も苦しいから、だからあと少しだけ、好きでいてもいいですか？

一人の影を背負い、シヨウと帰った道を一人で帰る。いつも繋いでいて暖かった右手は冷たいけれどそれでも良かった。空を見上げる。

いつか、あたしにもまたあの頃の、いやあの頃以上の幸せがやってくるだろう。

シヨウのことも、また友達だと思える時が来るだろう。

フツと笑い、あたしは帰る。

後ろでシヨウとあの子の楽しげな声がした。

「あ。」

綺麗な夕焼け。

「明日は晴れるかな。」

昨日の自分より今のあたしの方がきつと大人だろう。

ありがとう、だんて柄にもないことを言ってみる。

風が吹いた気がした。

Christmas present 前篇（前書き）

ハッピーエンドを目指しました。
クリスマス物第2弾です。

Christmas present 前篇

「寒いな…。」

雪を踏みつければザクザクと音がする。

気温はマイナスだ。寒いに決まっているのだがそれ以上に、藤沢輝は心が寒かった。

そういえば、明日はクリスマスだな…と、雪を降らせている灰色の雲を見上げて輝はふと、そう思った。明日はクリスマスなら当然、今日はクリスマス・イブということになる。

ああ、だから今日は皆妙にはしゃいでいるのか…。と、輝は今気付き道行く人を見た。

子供は当然はしゃぎ、カップルはベタベタとくっついていて。彼女の方はミニスカートだった。輝は可愛い、とかそういう前に寒くないのかと思った。いくらロングブーツでも寒いだろうにと、そのカップルを哀れむ目を見た。

輝は、いつもと違っていた。いつもなら彼女と一緒に今頃部屋を片付けのことも気にせず飾り付けて、はしゃいで好きでもない甘ったるいケーキを食べている頃だ。そう、さっき通って行ったカップルのように。でも、今の輝は到底祝う気にはなれないしケーキも食べる気は起きないし友達と一緒にカラオケに行く気にさえなれない。なぜか、そう輝の彼女は1年目に亡くなったからだ。交通事故でもなく、病気でもない。そう、それは一瞬の出来事。心臓麻痺だ。突然の悪夢に輝はこの1年、現実逃避をしていたのだ。中学1年生からずっと付き合っていたのだ。今は大学3年生。中学生からこれほど付き合えるのは珍しいな、と思った。

8年間付き合った最愛の人が突然、亡くなったのだ。

輝はよく最愛の人、神崎萌と行ったカフェの前で立ち止まった。いつの間に来ていたのかは知らない。でも、入る気にはなれない。入りたくないのだ。

思い出してしまいそうでそうしたら忘れようと、いや、諦めようとしたこの1年が無駄になる。

輝は歩きに歩き、そうして墓地に来ていた。…そう、萌の墓だ。

こうして墓でも見ない限り無意識に、いや無意識でもない。探してしまうのだ。萌の面影を…。だから週に一度花を添え輝はここに来る。死んだ、と言うことを自分に言い聞かせるため、そして萌が寂しくないように。

今日は、墓場には似合わないが輝は赤いバラを持ってきたのだ。2本、両方に1本ずつ。意味もあるのだ。

「萌、今日はクリスマス・イブだな。しかもホワイトクリスマスになりそうだ。」

輝は萌の墓の前で座った。

泣きそうになるのを堪えて一息ついてまた喋り始めた。

「今日は、赤いバラだ。墓場には似合わないかもしれないけれど…意味もちゃんとあるんだ。ほら、お前が教えてくれただろ？花言葉。たしか赤いバラは…愛情、だったっけ…。ちよつと大学生にしてはクサいか…。」

今でも覚えている萌の言葉の一つ一つ。

「お前、花言葉とかそういうの、好きだったから…。だから、俺、花言葉の本かってさ、お前に添える花もちゃんと意味をつけて…買って…。」

雪が落ちて周りの雪と同化するように輝の声もだんだん細くなり墓地から少し離れたところから聞こえてくる音楽や大声で消え入りそ

うだった。先週、輝が持ってきた花はミヤコワスレだった。花言葉は「しばしの別れ」。また、すぐ会いに来てくれるはず…と、輝は思っていた。信じていたのだ。

輝は立ち上がり萌の墓に積もった雪を全て綺麗に落として「また、来るからな。」と言い墓地から出た。手が冷たくて真つ赤だ。霜焼けになるかもしれない、と思った。適当にコンビ二によりコーヒーを買い、特にやることもないので家に帰ることにした。…萌が生きていれば、生きていれば…今、きつとパーティでもしているはずの家へ。

扉を開ける。当然、寒い。そして静かで散らかっている。

萌とは半同棲みたいなもので合鍵もお互い渡していたし大学を卒業して仕事も決まれば結婚しようと思いは考えた。

冬になりアルバイトから帰ってこれば部屋の中は暖かくて綺麗になっている。世話好きの萌がしてくれた。そうして得意の料理で温かい飲み物でも作っていてくれるのだ。ただ、機械音痴でたまに壊すこともあったが。

思い出せば笑えてくるし、泣けても来る。同時に後悔する。大学で結婚していたのは少なかったけれどもいいわけではなかった。禁止もされていない。なら、結婚しておけば良かった。萌と、もったいなかった。でも、仕事もない学生で結婚すれば費用もかかる、と思っていたがこんなことならしておけば…と後悔がさらに後悔を呼ぶのであった。

冷たい廊下を歩きリビングに入り、電気ストーブの電源を入れる。少し小さ目なアパート。だが思い出だけは大きく輝に苦痛を与えていたのだった。

黒いソファに座り冷めたコーヒーを一気に飲む。

ブラックだから、苦いし冷たい。懐かしくなるのは暖かくて甘党な萌が作ったカフェオレ。甘いのは苦手だったがあの甘さだけは輝は好きだった。

「…何してんだか。」

ため息とともに言葉を漏らした。

電気ストーブが油の臭さと共に豪快な音と熱を出す。温かいはずが冷たく感じるのは気にせいか。

カーテンも開けずに薄暗い部屋の中、輝はキッチンを睨んでいた。萌がよく立っていた場所だ。

「依存、しすぎだな、こりゃ。」

それでも、それだけ、それほど萌が好きだったのだ。

クリスマスがこれほど最低に思えるとは。

一人の命の重みを輝は1年、ずっと感じてきた。まるでどこかのおじいさんみたいではないかと思った。

今年は、いやこれからは最低なクリスマスは続く。来るたびに萌を思い出す。毎日なのだがクリスマスは特に。

「気を紛らわすには…」

思いつかない。何をしようにも手がつかないのだ。外に行こうとは思わないし友達からの誘いも断る。それこそ適当な理由をつけて。早く、過ぎればいい。こんなクリスマス。最低最悪だ。

俺は萌に依存し頼りすぎていたのか。…情けねえ。男のくせに。

そつえば、と思いつく。

昔、死んだばあちゃんが言っていた。ウサギは寂しくなると死ぬ、と。

自分がウサギなら死ぬか。輝は思った。でも、死ねば萌に会える。そう思った。だが、

「怒る…な。」

4年前、萌は輝に「もし、私が死んだらどうする？」と聞いたのだ。輝はその時「萌を追って死ぬ。」とすぐに答えた。心から出た答えだ。だが萌は顔をしかめて俺を怒った。

「死なないでよ。私の分まで生きようとか、そう思ってたよ。」

「萌の分まで生きる…か。随分残酷なこと言うよ。」

それじゃあ、この途方もない悲しみはどうする？これを背負い生きるのは苦痛だ。

早く夜がこれば寝れる。そうして一日が終わり、そうして一日一日終わり、死にも近づくのだろうか。

輝はボーっとしながら、ソファに座ったまま、動かなかった。

Christmas present 中編

萌が死に大学の成績も落ちてきている気もした。
このままじゃダメだ。

輝は立ち上がった。そうして久しぶりに料理をした。簡単に作れる
カレーにして、輝はたらふく食べた。

「クリスマスが終わったら…で、いいかな。」
クリスマスまで、萌のことは好きでいる、クリスマスが終れば萌へ
の未練も切ろう。輝はそう決めた。これでは生活も出来ない。

洗い物をして、歯磨きをして輝は早めに寝ることにした。明日はど
うするか、街をぶらぶらと歩くか…そんなのは明日考えようと思い
大学生にしては早いが11時に寝た。
クリスマス。明日で、萌への思いは全て断ち切ろう。輝は泣きたか
ったがそれを押さえつけて電気を消した。

「輝…輝！起きて…」
「んん…うるさいな…」
「こら！輝、起きろ！」

輝は目を覚ました。眠くない。何故か、その声の持ち主だ。
間違いない、7年間聞き続け愛した人の…声。

「も…ゆる…？」

半目な目を何度も擦る。夢じゃないのか。だって、ありえない。萌は確かに死んだ。

葬式にも言つて、骨を見て、墓を見て…。
強く自分の頬を輝は強く叩いた。ヒリヒリして痛い。…夢ではないようだ。

「どうして…あ、俺…もしかして死んだのか？心臓麻痺でも起こったのか？いや、部屋が寒くて凍死？凍死はねえか…。は？あれ？」
ヤバイ、と輝は思った。
ついに自分も壊れたか？

萌は鈴のように綺麗な声で笑った。

「死んでるわけじゃない！…会いに来たの。」
「会いに…？」

萌の細くて小さな手が俺の頬に触れた。確かに葬式の時の冷たさではなく、温かみがあった。

「萌なんだよな…？」

「…輝、久しぶり。」

輝は反射的に起き上がり萌を力強く抱きしめた。すり抜けない。確かに、そこにいる。

「でも、どうして会いに…？いや、嬉しいけれど…。」

俺は萌が作ってくれた朝ごはんを食べる。久しぶりにまともな朝ごはんを食べたな…と頭の片隅で思った。

「…輝、まるで別人、だから…。」

萌の悲しそうな顔が輝にはとてもきれいに見えた。生きてるとは、言い難いかもしれないが死んでようが生きていようが、確かに萌はそこにいた。それだけで、輝はもうなんでも良かった。でもどうして会いに来てくれたのが分からなかった。

別人、萌は言った。考えてみればそうだったな…と輝は萌がいなく

なつてからの自分を思い出した。人が見てられるような物じゃないだろう。

「それに、輝がいい子にしてたから…サンタさんからのクリスマスプレゼントかな？」

「…ククツ…なんだよ、それ。」

…笑った。

輝は、今気づいた。笑ってなかった気がした。

萌が輝の頭を撫でた。昔、中学の時から…輝が萌を頭を撫でていたように。ただ萌の小さな手では大げさに動かしている。それがどうしようもなく切なく、愛しく思える。時間が、止まればいいのに。これが永遠に続けば…どれだけいいことか。それでもその願いは萌の一言でいとも容易く崩れさる。

「…でもね、今日一日しか無理なの。」

「え…？」

「クリスマスしか、無理なの。」

頭の中を強く殴られた感覚がした。

「輝、クリスマスで私のこと、諦めるんでしょう？」

「いやだっ…！」

輝は立ち上がり萌の方を強く掴んだ。

萌は死んだ。

でも、それが今はこうしてここにいます。生きてないかもしれないけれど温かい。なのに今日一日で、本当にもう萌とは永遠に会えなくなる…。

「だから…」

輝の手に萌の手が優しく被さる。

「今日一日、デートしよう？」

輝はいつも以上におしゃれをして萌の手を強く握った。そうではないと心配だった。今にも消えてしまうのではないか…そんな恐怖心があつたからだ。

「俺、やっぱり…。」

「私、諦めてくれるってわかった時嬉しかった。」

「どうして…。」

「だって、輝…あのままだと人形みたいだから。」

泣きそうな顔が目映る。手を握る強さを強くした。

「でも、やっぱり悲しいから会いに来ちゃった…。私、輝以上に寂しがり屋なのかも。」

優しく笑う萌に輝は再度抱きしめた。

「どこのカップルよりも、幸せに楽しく今日一日過ごしてやるうぜ。」

輝は強く優しく言った。萌を離して笑った。泣きたいのを抑えているから変な顔かもしれない。でも、今は笑っていたいから笑った。

最初に来たのはよく二人で一緒に帰っていた河原に来た。雪が積もっている。その間からは雑草が力強く出ている。

「わあー！変わらないね。」

萌ははしゃいで雪玉を輝にあてた。

「いて！何するんだよ！」

輝は萌を捕まえて頭をグシャグシャと、乱暴にでも優しくなでた。

「やだ！アハハ！」

萌も、楽しんでくれる。輝は、萌を連れて河原を歩きながら水族館に行った。行こうと約束してから行けなかったところ。近場に来たのだ。これなら1日でも平気だろう。

イルカのショーや、熱帯魚の水槽など見ていたけれど萌が一番気に入ったのは、モノクロの水玉模様のウツボだった。萌は少しズレたところもあったがそこがかわいくて輝は好きだった。

「口パクパクしてる！かわいい！」

ケラケラと笑いながらウツボをずっと見ている。

ウツボは岩の穴から出入りしながら口をパクパクさせていた。輝は、どこがかわいいのかいまいち分からなかったが、萌が喜んでるので別にいいかと思った。

お土産屋で萌はウツボの小さなマスコットを買い嬉しそうに鞆にしまった。

「次、どこ行きたい？」

「お昼の時間だし…。そうだ！あのお店に行こう！」

萌の言うあのお店とはよく言った喫茶店だ。レトロでそのオムライスが萌は好きだった。輝はすぐに萌を連れて行った。

結構なスピードで、オムライスを食べていく萌を輝はコーヒースライスに見ていた。

「食べないの？」

「ん？俺はいい。」

萌を見ていたかった。もう会えないのなら…。と。

マスターも、変わっていて萌は残念がった。

お金を払い一度、家に帰った。

ヘルメットを渡して萌を乗せた。

「バイクの免許、取ったの？」

「ああ。暇だったし。すっかり掴まつとけよ。」

ヘルメットの上からポンポンと萌の頭を軽くノックするよう撫で、バイクを飛ばした。

「どこ行くの?!」

風や騒音に負けないように強く萌は叫ぶように言った。

「秘密!!」

輝も強く言った。

30分ほど走らせて着いたのは中学校だった。部活をしているところもあり、懐かしくなった。

「わあ…ここ、輝とあった場所…」

「どうしても、来たくて。」

高校よりも来たかったところだ。

萌の鼻や頬は赤くなっている。それがまるで生きているかのように、輝は思えた。

萌の手を引いて、入りはしなかったけれど裏門のところに来た。

「ここで輝告白してくれたよね。あの時まだ小さかったのに…」

「小さいと言っても、萌より15センチは大きかったけれど。」

「今よりつてこと!」

確かに、伸びたけれど…と、輝は中学の時の伸長を思い出した。

166センチから、179センチか…。13?も伸びている。バスケット部だったしなあ…と思いつける。それに比べて萌はあまり変わらず小さい。155?だ。24?も違うのか…と萌の頭に手を置く。

萌も小さいことをきにしているのかあまち小さいという怒るので言わないで置いた。

もうそろそろ4時だ。水族館にいたり河原にいるのが長かったかな…と思った。昼食を食べたのは3時ごろ。遅めだ。

次は大きなモールに行った。

クリスマスだからか人は多い。でも、この中で一番幸せなのはきつ

とおれ達だ。輝は思った。

萌が欲しがった物は全て買った。…でも、萌は高価な物などあまり欲しがらず、安めなイヤリングなどしか頼まなかった。

「本当にそれでいいのか？」

「うん！」

大きな声で答えて向日葵のような笑顔でそう言った。

窓から外を見れば、もう真っ暗だった。

お腹もすいて来て簡単にごはんを済ませ、俺と萌はお互い、一番行きたかった場所へと向かうことにし、また寒い雪の降るホワイトクリスマスの中、バイクを走らせた。

C h r i s t m a s p r e s e n t 後編（前書き）

C h r i s t m a s p r e s e n t は、これで終わりです！

Christmas present 後編

バイクのエンジン音だけ響き何も喋らない。ただ、目的の場所に近づいていくのにつれて萌が俺の腰を抱く腕の強さを増していく。もう、タイムリミットも近いのだろう。それは、俺もよく分かっていた。だからこそ…ここに来たかった。

「…。」

萌は黙って嬉しそうに、でもどこか悲しそうに目を細めて公園のベンチを見つめている。

「覚えているよな…。」

「当たり前でしょ。忘れたくないよ…。」

中学生の時、早かったかもしれないけれどここで萌とは初めてキスをしたところ。世間で言う「ファーストキス」だ。ただ、ベンチは雪が積もっていて座れる状態ではなかった。だが、萌はベンチに近づいて息を吹き付ければ雪は一瞬にして散った。

「すげえ…。」

「幽霊つて、便利。」

淡く笑い物音一つ立てずに座った。そうして萌の言葉から、輝は「死んでいる」ということを頭に叩き付けられる。そして、虚しくなる。…また虚無のような日々を過ごすのかと思うと。

「ほら、輝も座って。雪も弱くなった。」

輝は黙って萌の隣に座り、肩を抱いた。…が、すり抜けたのだ。輝は驚き口を開けたまま、萌の顔を見る。萌はその顔が面白いのか、それとも死んでいることに対しての悲しみを隠しているのか笑った。

「何、その顔。」

「だって。さっきまでは…」

「時間が、近づいているから…」

一日だけ。もう、夜の11時30分。萌の体が薄くなってきた。

「ねえ、これで私のこと、諦めて…」

「…萌は。」

「本当は嫌だよ。…でもね、輝のことを見てればその方が輝のためなの。」

「俺のためって…なんだよ。」

自然と拳に力が入るのを輝は感じ取った。萌の体…いや、霊体をすり抜けた右腕がなんと恨めしい。

萌は一呼吸し、また喋り始めた。永遠に感じた。周りは暗いけれど白い雪だけが暗い夜空から、暗い公園に静かに降っている。それがなんとも言えないほどきれいで悲しいものだった。

「死んだ人は蘇らない。」

「でも、こうして萌は…」

「私ね…聞いて。…クリスマスが終わったら私の命と言うか、魂?…転生するんだ。」

「転生…?」

「輝、こういうこと疎いからわかりづらいかもしれない。けれど輪廻ぐらいいは聞いたことあるでしょ?」

「ああ…」

萌が説明したことを輝は頭の中で何度も、何度も繰り返していた。

輝、私の魂はね違う人か動物か、あるいは植物か…どれかになるんだ。でもね、悲しんじゃいけないの。魂って凄くて…生きている間、その人が愛したり、好んだ相手の近くに必ず転生出来るんだって。だからもしかしたら私の前世は輝の前世と今、私たちのように…恋仲だったかも…。なんてね。…だから、すぐ、私生まれ変わって会いに行くから、待ってて。

「…」

「輝。私が転生しなかったらもう会えないのと同じだよ。」

「せめて俺が死ぬまで…」

「ダメ。」

強い口調で言う萌に輝は泣きそうな目を向けた。…男なのに、泣くなんてな。輝はそう思っていたけれど、泣きたい気持ちはどうしても抑えられるものではなかった。

「輝に…もう一度…中学生の時、見ていたあの夢…追いかけてほしくて…」

「！」

輝の夢。それは医者になること。

幼少時に重大な病気にかかりそれを助けてくれた先生と仲良くなっ

てから輝は医者を目指していた。

「輝が夢について喋るときの横顔大好きだったから、もう一度見たかった。」

「…萌…。」

11時50分。時間は残酷にも進み、止まることは知らない。

「あとね…。これだけは言って置きたかった。」

「なんだ…？」

「ありがとう。ごめんね…。愛してる。」

萌が笑う。輝は無駄と分かっているけど、もう、半分透けてしまっている萌を強く抱きしめた。…本当に、サンタからのプレゼントかと輝はその時思った。萌のことを今は、確かに抱きしめれている。萌自身も驚いていた。

「ありがとう、萌。俺も…ずっと、ずっと…愛しているから…。」

「…ありがとう。」

静かに、まるで雪のように静かで、だけれど純粋な…そんなようなキスをした。輝は萌の顔を見た。

萌は今までで一番きれいだ、と思う笑顔で笑っていた。そうしてもう一度「ありがとう」と呟くと萌は公園の夜の景色の中、同化していくように消えていった。萌が消えたところには輝が買ってプレゼントしたイヤリングが落ちていた。

輝はそれを拾い、一筋の涙を流してイヤリングを大切に、壊さないようにポケットに入れた。そうしてバイクに乗った。

「萌、ありがとう。メリー・クリスマス。」

輝もまた、萌と同じように笑い、帰路についた。時間は12月26日の深夜0時だった。

「食べ物が喉に詰まり、窒息しかけた時はハイムリツヒ法など…。」

あれから、2年後。輝は医師への夢をもう一度歩き始め、今は講演を聞いているのだった。

勉強もしっかりして、幼少時助けてくれた医師へ手紙を書けば返事はしっかりと帰って来た。力強い字で「君なら、大丈夫。」と書いてありそれが輝にとってすごく嬉しく、力強く感じるものだった。

講演の帰りは、聞いている間は夢中で気が付かないが、首や肩は案外痛むものだ。

「いててて…」

輝は腕を大きく伸ばして伸びをした時、チャリンという金属が落ちた音がする。

「すみません、これ…落としましたよ？」

「え？あ！」

輝はそれを素早く取った。…萌のイヤリングだ。お守りのようにし

て輝は持っているのだ。

「大事なものですか？」

「はい。すみません、ありがとうございます。」

輝は顔を上げてその時、初めてその人の顔を見た。

「…萌？」

「え？」

その女性は驚いたがすぐに小さく笑った。萌に似ていたが、確かに違った。それに、輝はもう2年前とは違い、萌がいなくなってもしつかり、勉強も生活もできた。墓参りも毎週行くことは忘れない。そして、なによりもう、面影は探さなくなった。萌はもう、いないが確かに自分の中で生きているのだ。

「違いますよ。多分、似ているんでしょうね。私は柊朱音です。」

「すみません、あまりにも似ていたので…。でも、柊さんは柊さんですよ。」

「そうですね…。私は私、です。」

「俺、藤沢輝です。自分だけ名乗らないのも、何か、嫌ですし。」

朱音は優しく笑った。明るい栗色の髪の毛が風に乗り、フワリと揺れた。

12月25日

「ほーら、永久。クリスマスプレゼントだぞ！」

「わあい！」

「何を貰ったのー？」

「お人形さんと綺麗なイヤリング！…でも、片方だけだよ？」

「片方はママが持っているぞ！」

「あら、これ…。」

朱音と出会い10年後。輝は医師になり、朱音と結婚して女の子が一人、出来たのだ。

藤沢永久。

この名前は朱音がつけた。

輝から萌の話聞き、朱音はこの名前を付けたのだ。

「ふきつと、この子は…萌さんね。…名前は…そうね、萌さんはこれからもずっと輝、あなたの傍で見守り続けてくれる。あなたが死んでしまっても生まれ変わり藤沢輝でなくなったとしても…。そしてこの子は、あなたが萌さんに会いに行くまで萌さんの代わりとなつて見守ってくれる。それがきつと続くの。永遠に…。」

朱音は、全てを悟りこの名前を付けたくれた。そして輝も、大事な

人に形見分けということで、朱音に、永久に萌の残したイヤリングを片方ずつ渡したのだ。

そして輝は朱音の言った言葉と、萌の残した言葉をいつも頭の中、深く刻み込んでいる。

「あなたの傍で見守り続けてくれる。」

「ありがとう、ごめんね。…愛してる。」

「永久。」

「なあに？パパ！」

「永久は、パパの最高のクリスマスプレゼントだ！」

そして、次の日、輝は朱音と永久を連れてあの公園に行くのだった。永久と同じくらいの最高のクリスマスプレゼントをくれた思い出の場所へと。

C h r i s t m a s p r e s e n t 後編（後書き）

終わりました！

…ハッピーエンドでしたかな…。

遅いですが、クリスマス物です！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4956z/>

恋模様、晴れ時々雨。

2011年12月25日22時45分発行